

学位被授与者氏名	那 瑞萌（な ずいほう）
論文題目	自己開示が親密感に与える影響 ——相互性規範と適切性規範について——
論文審査結果の要旨	これまでの研究において、初対面の段階から深い関係となる段階まで自己開示量は一貫して増加し続け、親密化と自己開示の深まりが連動することは繰り返し指摘されてきた。また、開示の程度を規定する相互性規範と適切性規範の存在も明らかにされている。しかし、これらの規範に従うだけでは開示が深まる親密化を説明できないため、親密化過程における規範からの逸脱を取り上げることは研究テーマとして非常に興味深く、学術的な意義は大きい。 先行研究のレビューにおいては、議論されるテーマとの関連がわかりにくい論文の唐突な紹介もいくつか散見されるが、古典的な研究から新しい研究まで幅広く網羅されている点は望ましく、本研究の課題の導出もわかりやすく書かれている。 本研究で用いられた場面想定法による調査は、2つの規範と開示対象の親密度2種、開示場面2種、自己開示の程度3種を組み合わせることで親密感への影響を検討できるように巧みにデザインされている。人工的な想定場面での測定ではあるものの、現実場面ではこれほどの複雑な条件の組み合わせを検討することは困難であり、これら複数の要因の相互作用を扱う調査方法を開発した点は高く評価できる。 得られたデータは多くの切り口から分析する可能性を含んでいるが、論点の絞り込みや分析方針の見通しがやや甘かったことから、分析の目的から結果に対する考察までの一貫した論旨が読み取りにくい部分があり、筋道を整理する余地が残っている。また、分析結果の表記にはやや不明瞭な部分もみられるが、それぞれの結果に真摯に向き合っており詳しく考察されている。全体として、科学論文としての形式に則っており修士論文としても妥当な水準であると認めることができる。 2026年2月20日に、北九州市立大学北方キャンパス4号館4-301教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士(人間関係学)として十分な内容であると判定した。